

(牧師室より)

[たまの受洗]

大河ドラマ「麒麟がくる」も2月7日が最終回との事。光秀の娘たまには芦田愛菜が当てています。彼女は小さい頃からたまにあこがれていたと新聞に。ドラマではたまの結婚、受洗、最期がどのように描かれるのでしょうか。司馬遼太郎の『胡桃に酒』にたまの事が書かれています。それによるとたまは絶世の美女という事。「たまの顔と姿は、十六歳の忠興にとってうつくしいというよりもはや神にちかひように思われた」。忠興はたまの夫となった人。「妻が他の男に通じるかもしれぬことを忠興はおそれている」。そこで妻を外には一歩も出さず内に他の男を入れないという徹底ぶり。「忠興のつくったいわば牢獄にいるたま」は孤独を感じたか。そんな彼女に切支丹の小侍従などから天主（でうす）の教えが伝えられるようになる。「悲しむ者は幸福なり。というキリストの言葉を知ったとき、儒教よりも禅学よりも、この一語だけが自分を救いうるとおもった。傾倒の最初はこのことばからであった」。たまは「洗礼をうけることをはげしく焦（こが）れ」るに至りますが外出して教会で受洗することは困難。そこで神父は自分の代理として小侍従を指名。彼女は勇気をもって引受けたまに洗礼を授けます。「洗礼名は『伽羅者（ガラシャ）-聖寵』と名づけられた」……。このあとは省略しますがたまは決死の覚悟で洗礼を受けたことが思われます。